

乳児期の子どものアタッチメント安定性と幼児期の社会情動コンピテンス —縦断的検討—

富山大学附属病院周産母子センター 本島優子

Children's attachment security and socio-emotional competence from infancy to early childhood -A longitudinal study-

Maternal and Perinatal Center Toyama University Hospital MOTOSHIMA, Yuko

要約

本研究は、乳児期における子どものアタッチメント安定性が幼児期における子どもの社会情動コンピテンス、特に情動理解と問題行動とどのように関連するのかについて縦断的検討を行うことを目的としたものである。生後 18 ヶ月にアタッチメント Q ソート法による子どものアタッチメント安定性の測定を行い、生後 30 ヶ月に子どもの情動理解課題を行い、生後 42 ヶ月に子どもの問題行動について母親による評定を求めた。その結果、生後 18 ヶ月にアタッチメントの安定性が高い子どもほど、生後 30 ヶ月において情動理解が高く、また生後 42 ヶ月における問題行動が少なかったことが示された。子どもの良好な社会情動発達を支える下地として、乳児期における子どものアタッチメントの重要性が示唆された。

【キー・ワード】アタッチメント安定性、情動理解、問題行動、縦断研究

Abstract

This longitudinal study examined the relationship between infants' attachment security and later socio-emotional competence, especially emotion understanding and behavior problems. Mother-infant Q-sort attachment security was assessed at 18 months. Children's emotion understanding (abilities to recognize facial expressions associated with happy, sad, angry emotions) was assessed at 30 months. Children's behavior problems were assessed by their mothers at 42 months. Results showed that infants' attachment security at 18 months was related to more advanced emotion understanding at 30 months and lower behavior problems at 42 months. These results suggested the importance of infants' attachment security for later socio-emotional development.

【Key words】 attachment security, emotion understanding, behavior problems. a longitudinal study

問題と目的

子どもの安定したアタッチメントは、後の子どもの種々の社会情動コンピテンスと関連することが知られている。たとえば、園田・北村・遠藤（2005）によると、安定型の子どもは、社会的に有能でクラスメイトに好かれており（Lafreniere & Sroufe, 1985）、共感性や仲間への社会的コンピテンスが高いこと（Kestenbaum et al., 1989; Verschueren & Marcoen, 1999）、また全般的に問題行動を示すことが少なく（Erickson, Sroufe, & Egeland, 1985）、他者の感情に高い関心や理解を示すこと（Laible & Thompson, 1998）が報告されている。しかし、これらの研究はすべて国外で行われているものであり、日本においてはほとんど検討がなされておらず、特に縦断的研究となると、さらに数少ないのが現状である。日本においても、子どもの安定したアタッチメントが後の子どもの良好な社会情動コンピテンスと関連しうるのか、実証的検討を試みる必要がある。

そこで本研究では、日本における子どものアタッチメント安定性と社会情動コンピテンスとの関連性について、乳児期から幼児期にわたる縦断的手法を用いて検討を試みたいと考える。特に本研究では、社会情動コンピテンスの指標として、子どもの情動理解と問題行動について取り上げる。

まず、子どもの情動理解とアタッチメントとの関連について、これまでの研究で、アタッチメントが安定している子どもほど情動理解が良好であることが報告されている（Laible & Thompson, 1998; Ontai & Thompson, 2002; Raikes & Thompson, 2006）。たとえば、Raikes & Thompson（2006）の研究では、2歳歳のときにアタッチメント Q ソート法を用いて測定された子どものアタッチメント安定性が3歳になったときの子どもの情動理解を予測したことが明らかにされている。しかし、Raikes & Thompson（2006）の研究では、2歳時点での子どものアタッチメント安定性が測定されており、より早期の乳児期における子どものアタッチメント安定性に関しても、同様に後の子どもの情動理解と関連しうるのか検討を加える余地がある。

また、子どもの問題行動とアタッチメントとの関連性については、これまでの研究で、子どものアタッチメントと問題行動が関連することが報告されている（Erickson et al., 1985; Lewis, Feiring, McGuffog, & Jaskir, 1984）。たとえば、Erickson et al.（1985）の研究では、ストレンジ・シチュエーションで測定されたアタッチメントが安定型の子どもは、回避型、アンビヴァレント型の子どもよりも、全般的に問題行動を示すことが少なかったことが示された。また、Lewis et al.（1984）の研究でも、安定型の男児でもっとも問題行動が少なかったことが報告されている。こうした実証的知見が日本の子どもにおいても確かめられるのかどうか、検証を加える必要がある。

以上を踏まえて、本研究では、乳児期における子どものアタッチメント安定性が幼児期における子どもの社会情動コンピテンス、特に情動理解と問題行動とどのように関連するのか、乳児期から幼児期にわたる縦断的データを用いて実証的検討を行いたいと考える。より具体的には、生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性と、生後 30 ヶ月における子どもの情動理解、さらには生後 42 ヶ月における子どもの問題行動との関連性について検討することとする。

方 法

研究協力者

妊娠期を起点とした親子関係と子どもの発達に関する縦断研究に参加している関西（主に京都）・北陸（主に富山）地区在住の母親 38 人とその子ども 40 人（うち二卵性双生児 2 ケース含む）を対象とした。第 1 子 22 人（55.0%）、第 2 子 18 人（45.0%）、男児 22 人（55.0%）、女児 18 人（45.0%）であった。これまでの調査時期は、妊娠後期、生後 2, 6, 9, 18, 30, 42 ヶ月であり、本研究では、生後 18, 30, 42 ヶ月のデータについて報告する。

手続き

Time1 生後 18 ヶ月に家庭訪問し、日常場面における子どもの行動について約 2 時間程度の自然観察を行い、子どものアタッチメント安定性の測定を行った。

Time2 生後 30 ヶ月に家庭訪問し、子どもに情動理解の実験課題を行った。

Time3 生後 42 ヶ月に子どもの問題行動に関する質問紙を郵送し、母親に回答してもらった。回答後、郵送で返送してもらった。

測度

子どものアタッチメント安定性 生後 18 ヶ月に家庭訪問し、日常場面における子どもの行動について約 2 時間程度の自然観察を行った。母親には普段通り過ごしてもらうようお願いし、普段家庭でその時間帯に行っていることをやってもらうようお願いした。遊び、昼食、おやつ、散歩、家事、買物など日常の生活場面について観察を行った。なお、観察場面についてはビデオカメラで録画を行った。観察終了後、観察中に見られなかった子どもの行動（留守番時や寝かせつけるときの様子など）について、母親から直接聞き取りを行った。訪問後、家庭でのビデオ観察をもとに、Waters & Dean (1985) のアタッチメント Q ソート法 (AQS) を用いて、母子間の愛着安定性についての評定を行った。この手法では、子どもの行動について記述された 90 枚のカード（たとえば、項目 14:「新しく遊べるものを見つけると、お母さんの方に持ってきたり、離れたところからお母さんに見せたりする」など）を、それぞれ 1:「まったく当てはまらない」から 9:「非常に当てはまる」までの 9 段階に 10 枚ずつ振り分け、各カードにその段階の得点を付与する。そして、予め複数の専門家によって判断されたもっともアタッチメントが安定している子どもの基準配列の得点(Waters, 1995)と、実際の観察で得られた子どもの配列得点との相関を求め、Fisher の z 変換した値を子どものアタッチメント安定性得点とする。値は、おおよそ-1.00~1.00 をとり、得点が高いほど、専門家が想定したアタッチメントが安定している子どもの行動パターンに近似することになり、アタッチメント安定性の高さを意味する。

また本研究では、Howes & Ritchie (1999) に従い、AQS の各項目の得点を「回避」、「抵抗」、「慰撫探求」、「安全基地」、「調和性」の下位尺度に分類し、それらの下位尺度の得点を算出した。本研究では、アタッチメント安定性得点に加えて、これらの下位尺度得点も分析に用いることとした。

子どもの情動理解 子どもに 3 枚の表情顔の絵（笑っている顔、怒っている顔、泣いている顔）を呈示し、「悲しいときのお顔はどれ？」と質問し、3 枚の顔の絵から一枚選択させる課題を行った。

喜び・怒り・悲しみの情動に関して、それぞれ 2 試行ずつ、計 6 試行ランダムな順序で実施した。そして、正答を 1 点、誤答を 0 点とし、合計得点を算出した。

子どもの問題行動 子どもの問題行動を把握するため、Achenbach (1992) の Child Behavior Check List/2-3 (CBCL, 2-3 歳用) を使用し、母親による評定を求めた。CBCL は子どもの情緒および行動的な問題を評価するための 100 項目から成るチェックリストであり、記述された子どもの行動について 3 件法 (0:「当てはまらない」～2:「よく当てはまる」) で回答するものである。チェックリストは不安／抑うつ、引きこもり、睡眠の問題、身体の問題、攻撃的行動、破壊的行動の 6 つの症状尺度とその他の問題尺度から構成される。うち、攻撃的行動と破壊的行動の合計得点が外在化問題 (Externalizing)、不安／抑うつと引きこもりの合計得点が内在化問題 (Internalizing) として分類される。本研究では、この外在化問題尺度と内在化問題尺度のそれぞれの得点を算出し、分析に用いた。

結 果

各変数の平均値と標準偏差を表 1 に示す。

表 1 各変数の基本統計量

	N	平均値	標準偏差
アタッチメント安定性得点	40	0.41	0.24
回避	40	4.87	1.37
抵抗	40	3.71	1.28
慰撫探求	40	6.32	1.17
安全基地	40	5.29	1.03
調和性	40	6.66	1.09
情動理解得点	25	4.36	1.68
内在化問題	33	5.00	4.30
不安／抑うつ	33	2.75	2.46
引きこもり	33	2.24	2.59
外在化問題	33	8.54	6.23
攻撃的行動	33	5.75	4.42
破壊的行動	33	2.78	2.11

次に、生後 18 ヶ月における子どものアタッチメントと生後 30 ヶ月における子どもの情動理解および生後 42 ヶ月における子どもの問題行動との関連性を検討するため、相関分析を行った。その結果を表 2 に示す。

表 2 子どものアタッチメントと情動理解・問題行動との相関

		アタッチメント 安定性得点	回避	抵抗	慰撫探求	安全基地	調和性
情動理解	(N=25)	.39+	-.31	-.21	.30	.28	.33
内在化問題	(N=33)	-.34+	.05	.26	-.05	.02	-.21
不安／抑うつ	(N=33)	-.11	-.23	.16	.06	.28	-.08
引きこもり	(N=33)	-.45**	.30+	.29	-.14	-.23	-.27
外在化問題	(N=33)	-.15	.25	.00	-.29	-.10	-.04
攻撃的行動	(N=33)	-.20	.22	.05	-.26	-.09	-.06
破壊的行動	(N=33)	-.03	.29	-.10	-.33+	-.11	.02

p<.10, **p<.01

相関分析の結果、生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性得点と生後 30 ヶ月における子どもの情動理解との間で正の相関傾向が認められた。また、生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性得点と生後 30 ヶ月における子どもの引きこもり得点や内在化問題得点との間に有意な（もしくは有意傾向の）負相関が認められた。このことから、生後 18 ヶ月においてアタッチメントが安定している子どもほど、生後 30 ヶ月における情動理解が高く、また生後 42 ヶ月における引きこもりの問題や内在化問題全体がより少なかったことが示された。

また、アタッチメントの下位尺度のうち、生後 18 ヶ月における子どもの回避行動と生後 42 ヶ月における引きこもり得点との間で正の相関傾向が認められた。また、生後 18 ヶ月における子どもの慰撫探求行動と生後 42 ヶ月における破壊的行動の間でも負相関の傾向が認められた。これらの結果から、生後 18 ヶ月において回避行動が高い子どもほど、生後 42 ヶ月において引きこもりの問題が多く、さらには生後 18 ヶ月において母親への慰撫探求行動が高い子どもほど、生後 42 ヶ月において破壊的行動がより少なかったことが示された。

考 察

本研究では、生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性が後の生後 30 ヶ月における子どもの情動理解や生後 42 ヶ月における子どもの問題行動とどのように関連するのかについて縦断的検討を行った。以下、得られた結果について順に考察していきたい。

まず最初に、子どものアタッチメントと情動理解との関連性について、本研究では、生後 18 ヶ月

においてアタッチメントが安定している子どもほど、後の生後 30 ヶ月において情動理解がより高かったことが示された。アタッチメントと情動理解との関連については、これまでもアタッチメントが安定している子どもほど、情動理解が高いことが報告されている (De Rosnay & Harris, 2002; Greig & Howe, 2001; Laible & Thompson, 1998; Ontai & Thompson, 2002)。両者の関連性のメカニズムについては、必ずしも十分に明らかにされているわけではないが、おそらく安定したアタッチメント関係が母子間での情動に関わるオープンなコミュニケーション (情動に関わる質の高い豊かな会話) を促し、ひいてはそれが子どもの情動理解を促進するのではないかと推測されている (Thompson, 2000)。現に、Raikes & Thompson (2006) の縦断研究では、アタッチメントが安定している子どもほど、母子間で情動に関わる言及がより多く見られ、ひいてはそれが子どもの情動理解に促進的に作用したことが報告されており、Thompson (2002) の仮説が実証的に支持されつつある。本研究でも欧米での先行研究と同様に、子どもの安定したアタッチメントが後の子どもの情動理解と関連することが確かめられたが、安定したアタッチメントがなぜ子どもの情動理解を促進するのか、その詳細なメカニズムについては、今後さらに追究していく必要があるだろう。

次に、子どものアタッチメントと問題行動との関連について、本研究では生後 18 ヶ月においてアタッチメントが安定している子どもほど、生後 42 ヶ月における引きこもりの問題や内化問題全般がより少なかったことが示された。乳児期における子どもの安定したアタッチメントは、後の幼児期における子どもの問題行動に抑制的に作用し、子どもの適応に重要な役割を果たしていることが示唆されたといえる。また、従来の先行研究 (Erickson, Sroufe, & Egeland, 1985; Lewis, Feiring, McGuffog, & Jaskir, 1984) では、ストレンジ・シチュエーションで測定された子どものアタッチメントが子どもの問題行動と関連することが報告されていたが、ストレンジ・シチュエーションのみならず、本研究で用いたアタッチメント Q ソート法で測定された子どものアタッチメントに関しても、同様に子どもの問題行動との関連が認められたというのは興味深い。

さらに本研究では、アタッチメント Q ソート法で測定された子どものアタッチメントの下位行動として、回避行動と慰撫探求行動において、子どもの問題行動との関連性が認められた。すなわち、生後 18 ヶ月において回避行動が高い子どもほど、生後 42 ヶ月において引きこもりの問題 (たとえば、人に親しみを表さない、人が愛情を示しても反応しない、自分のからにこもって人と関わらない等) がより多く見られ、また生後 18 ヶ月において慰撫探求行動が高い子どもほど、生後 42 ヶ月において破壊的行動 (たとえば、物を壊す、動物をいじめる、人や動物をけがさせる、物をちらかす等) がより少なかったことが示されたのである。乳児期における子どもの母親への回避的行動が、後に人への関心・興味の希薄さ、対人的関わりの乏しさ、親和性の低さといった対人関係の引きこもりや撤退の問題とつながり、本研究の縦断的データの知見から、母親への回避的行動が徐々に人全般への回避的行動に拡大されていくことが示唆されたといえる。また、不安なときや不機嫌なときに母親への慰めや接触を求める子どもの慰撫探求行動が、後の人や物に対する破壊的行動の少なさと関連するという結果は、おそらく子どもの不安や苛立ち、不機嫌などネガティブな情動が、母親の慰撫などによって適切に調整されることで、子どもの心が穏やかで安心した状態で保たれ、(ネガティブな情動状態を) 物などへの破壊的行動で解決しようとする情動制御方略が回避されるためではないかと推察される。

もちろん、この点に関しては、まだ推測の段階に過ぎず、今後さらに実証的に検討していく必要があるだろう。

以上、本研究では乳児期における子どものアタッチメントが後の幼児期における子どもの社会情動コンピテンス、特に情動理解や問題行動と関連することが縦断データから実証的に示され、子どもの良好な社会情動発達を支える下地として、乳児期における子どものアタッチメントの重要性が示唆された。今後の課題として、子どものアタッチメントと後の子どもの社会情動コンピテンスとの関連性を説明するメカニズムやプロセスについて、より詳細に明らかにしていく必要があると思われる。

引用文献

- Achenbach, T.M. (1992). *Manual for the child behavior checklist/2-3 and 1992 profile*. Burlington, VT: University of Vermont Department of Psychiatry.
- De Rosnay, M., & Harris, P.L. (2002). Individual differences in children's understanding of emotion: The roles of attachment and language. *Attachment and Human Development*, **4**, 39-54.
- Erickson, M.F., Sroufe, L.A., & Egeland, B. (1985). The relationship between quality of attachment and behavior problems in preschool in a high-risk sample. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 147-166.
- Howes, C., & Ritchie, S. (1999). Attachment organization in children with difficult life circumstances. *Development and Psychopathology*, **11**, 251-268.
- Greig, A., & Howe, D. (2001). Social understanding, attachment security of preschool children and maternal mental health. *British Journal of Developmental Psychology*, **19**, 381-393.
- Laible, D.J., & Thompson, R.A. (1998). Attachment and emotional understanding in preschool children. *Developmental Psychology*, **34**, 1038-1045.
- Lewis, M., Feiring, C., McGuffog, C., & Jaskir, J. (1984). Predicting psychopathology in six-year-olds from early social relations. *Child Development*, **55**, 123-136.
- Ontai, L.L., & Thompson, R.A. (2002). Patterns of attachment and maternal discourse effects on children's emotion understanding from 3 to 5 years of age. *Social Development*, **11**, 433-450.
- Raikes, H.A., & Thompson, R.A. (2006). Family emotional climate, attachment security and young children's emotion knowledge in a high risk sample. *British Journal of Developmental Psychology*, **24**, 89-104.
- 園田菜摘・北村琴美・遠藤利彦. (2005). 乳幼児期・児童期におけるアタッチメントの広がり と連続性. 数井みゆき・遠藤利彦(編), *アタッチメント: 生涯にわたる絆*(p.67). 京都: ミネルヴァ書房.
- Thompson, R.A. (2000). The legacy of early attachments. *Child Development*, **75**, 145-152.
- Waters, E. (1995). The Attachment Q-Set. In E. Waters, B.E., Vaughn, G. Posada, & K.

Kondo-Ikemura(Eds.), Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **60**(2-3, Serial No.244). 247-254.

Waters, E., & Deane, K.E. (1985). Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters(Eds.), Growing points of attachment theory and research. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**(1-2, Serial No.209), 41-65.

謝 辞

本研究にご協力いただきましたお母様とお子さんに心より感謝申し上げます。